

(21)(1967-2-14) Schiller

(21)1967-2-14

Friedrich Schiller の Drama その他

Schiller の Drama は大別して"Wallenstein"(1799)以前のドラマと Wallenstein、及びそれ以後のドラマの3つに分けることが出来る。

第1群は Sturm und Drang のグループに属し、これには "Räuber"(1781) "Kabale und Liebe"(1784) "Die Verschwörung des Fiesco zu Gunua"(1783)、及び"Don Carlos, Infant von Spanien"(1787)がある。このうち Räuber, Kabale und Liebe 及び Don Carlos の3つには、次のような共通点がある。

すなわちそれらが宮廷の因襲、虚偽、背徳及び権勢力と知力や新しい生活を望む理想主義との対立の上に構成されていることである。そして Fiesco は共和政治を乱すものを倒すことを理由に兵を挙げた主人公が、迷った末ついに野心に従うことになる。それを見抜いた親友が、これを海に突き落とすことで、共和制が保たれることを表わしたドラマである。Don Carlos は Schiller がまだ歴史や哲学の研究を始めなかったときの作品だが、近代社会の対立を把握して作り上げた。以上4つの作品は、理想に燃える青年 Schiller の自由への願望と正義心の現れたものである。

Wallenstein は3部からなる壮大な歴史劇である。歴史劇は歴史的研究、その哲学的把握及び詩人的才能が結合して生まれる。Schiller はこの大きな課題と取り組み悪戦苦闘の後、傑作を完成したが、自己の健康を完全に損なうに至った。これは第1部 Wallensteins Lager、第2部 Die Piccolomini と第3部 Wallensteins Tod の3部11幕より成っている。

第1部は各地から集まった兵士の言動をとおして、その兵士の司令官の性格を表わすとともに、総大将 Wallenstein がいかなる人物かを予見させる。また Prolog で俳優の口上によって時代の背景と Wallenstein の人となりを浮き彫りにし、この作品は権力意志とかけた Wallenstein の運命がテーマであることを暗示している。

第2部は Piccolomini 父子の相克が中心である。しかしまた Wallenstein が姿を現わし、Max との対話によって彼が意志的性質

の持ち主であり、覇者を望む人間であることを示す。同時に複雑な人間性が現れているが、また獅子身中の虫というべき Oktavio を過信するといった短所も見事に描かれる。

第3部はこの劇のクライマックスをなし、Oktavio の策略が功を奏し諸将が背き去った後、わずかばかりの将兵を率いて入った城でも、従ってきた Buttler は実は激しい敵意を燃やし復讐の機会を狙っているが、Wallenstein は気づかない。第5幕では妹の伯爵夫人、天文学者などの警告を気にもとめず、寝入ったところを Buttler の部下に刺し殺される。

この作品の影響は甚大である。Dilthey は Schiller の将帥がなければ Kottwitz は不可能で、Wallenstein の陣営がなければ選帝侯 (Kurfürst) は生まれず、Max が書かれなければ Prinz von Homburg も書かれなかったに違いないと述べているが、確かにそうであろう。

この作品以後、"Die Braut von Messina" "Maria Stuart" "Die Jungfrau von Orleans" "Wilhelm Tell" などの作品が生まれた。

Maria Stuart は、救いを求めて亡命した身内のイギリス王エリザベートのため、無実にもかかわらず死刑の宣告をされたが、昔自分が夫に対して犯した罪の償いとしてそれを甘受し、自由の心から刑に服することで運命に打ち勝つスコットランドの女王を描いたドラマである。マリアを処刑して復讐欲を満足させたものの、臣下の愛と尊敬を失い一人寂しく残ったエリザベートの姿を描くことによって、手堅く建築的に積み重ねた作劇術のさえを見せている。

Die Jungfrau von Orleans では、Johanna は使命を遂行せよという精霊の呼びかけに答えて、英軍の隊長 Lionel への愛を断ち切ることで救われるさまが描かれる。Die Braut von Messina では、自由な決心によってこの世の葛藤を免れる有様が、二人の兄弟が知らないままに自分たちの妹を愛人として争う悲劇の結末として描かれる。なおこの作品は形式的には Chor を用いて、ギリシャ劇の様相を加えたところに他の作品に見られぬ特色がある。

Wilhelm Tell は Schiller の死の半年前に完成された。これは珍しく悲劇ではなく、Tell の好意をきっかけに、スイス人が奪われていた自由を回復する有様を描いたものである。一般には愛国劇とされている。それだけ作品の発表当時のドイツやオーストリアの状態は、自由のために戦った Tell を慕わしく思わせるものがあつた。

Schiller 以後、自然主義以前の最も注目すべき劇作家は Kleist(Heinrich von, 1777-1811)と Hebbel(Friedrich, 1813-1863)である。

Kleist は断片 "Robert Guiskard"(1808) "Der zerbrochene Krug" "Penthesilea"(1808) "ヘルマン戦争" "Prinz Friedrich von Homburg"(1810)などによって最もドイツ的ドラマを提供し、Hebbel もまた "Judith"(1840) "Maria Magdalena"(1844) "ヘロデとマリウムメ" "ギーゲスとその指輪"、さらに大作 "Die Niebelungen"(1860)によってドイツのドラマに光彩を与えた。

総じてドイツのドラマの特色は、登場人物の意志が強烈でその運命が悲劇的なことであるといえる。